

NEWSLETTER

2018年度 研究関連活動報告

2018年度 外教学会では研究、教育実践に関連して以下の研究大会及び他機関との共催の報告会を開催いたしました。研究大会は、授業実践、研究活動に役立つ内容であり、共催で開催した報告会は、校種を問わず今後増加が予想される外国につながる子どもたちの支援に関わる内容で、「学理と実際との調和」という関西大学の学是を体現する有意義なものでした。今回は、第13回研究大会及び共催イベントについて報告します。

◆ 関西大学外国語教育学会 第13回研究大会

テーマ:「新時代の外国語教育」

日時:2019年3月16日(土)

時間:13:30~16:30 (13:00より年次総会)

会場:関西大学千里山キャンパス 岩崎記念館4階

<プログラム>

【第1部】

基調講演:「機械翻訳 VS 英語を学ぶ子どもたち—翻訳力が英語力の鍵となる?—」

講師: 山田 優 先生 (関西大学外国語学部教授)

【第2部】

グループディスカッション「機械翻訳・通訳機を使った授業案」

講師: 池田真生子 先生 (関西大学外国語学部教授)

◆ 関西大学外国語教育学会 共催イベント

「外国につながる子どもを元気にするための実態調査報告会」

日時:2019年3月24日(日)

時間:13:30~16:30 (受付 13:00~)

会場:関西大学 梅田キャンパス 7階 701号室

主催: NPO 法人おおさかこども多文化センター

共催: 関西大学外国語教育学会

<プログラム>

【第1部】

調査報告 13:35~14:30(質疑応答を含む)

報告者: 数実浩佑、伊藤りお、林貴哉、王一瓊 (大阪大学大学院生)

内容: 外国につながる子どもの高校進学への支援の在り方を考える

大阪の府立高等学校に在籍する外国につながる子ども達を対象に実施したインタビュー及び約100人に対するアンケートによる実態調査の結果報告

【第2部】

当事者と支援者によるパネルディスカッション 14:40~16:00

当事者 (劉文恵、Biswas Chhetri)

支援者 (矢嶋ルツ、大阪市立中学校帰国した子どもの教育センター校担当教員)

コメンテーター (真嶋潤子、大阪大学教授)

コーディネーター (坪内好子、NPO 法人おおさかこども多文化センター理事)

【第3部】

調査結果を受けての提言 16:00~16:15

発表者: 米谷修 (大阪府立学校在日外国人教育研究会運営委員長)

【基調講演】

「機械翻訳VS英語を学ぶ子どもたち—翻訳力が英語力の鍵となる?—」

山田 優先生(関西大学外国語学部教授)

近年、あらゆる分野でICTの利活用が盛んに推奨されるようになってきました。教育現場も例外ではなく、学習者が一人一台ずつタブレットを持つ日もそう遠くないかもしれません。外国語教育に関して言えば、Web上の辞書やGoogle翻訳をはじめとする翻訳アプリや自動翻訳機の登場とその機能の飛躍的な進歩により、外国語学習に対する意識や勉強の仕方が大きく変わってきているように感じます。

会員の皆さんも、「機械翻訳の精度が増してきたから、外国語を勉強する必要などないのではないか」という意見を耳にした事があるかと思いますが、果たしてそうでしょうか。

第13回の研究大会は、この問いの答えを考えることを一つの目標に実施されました。

講師にお迎えした山田優先生のご専門は、翻訳通訳学で異文化コミュニケーション学にも大変造詣が深くていらっしゃる。長年、通訳翻訳者として国内外で実務に携われ、2015年からは関西大学で教鞭も執るマルチな才能をお持ちの先生です。

講演は、翻訳とは何か、脳と言語といった根本的かつ本質的な内容から、機械学習及びDeepLearningの解説、Google翻訳に代表されるニューラル機械翻訳を含む多様な機械翻訳のアプローチ法の紹介、翻訳の処理の深さと脳の活動領域に関わること自身の研究結果の報告、更には、翻訳において留意すべき6つの異なる言語学的レベルといった実務的なことに至るまで多岐に亘っており、久しぶりに頭をフル回転させる時間となりました。

以下にお話に出てきた新しい概念を中心に講演の内容をまとめてみます。

1) 機械翻訳の精度を上げるための作業に「プレエディット」と「ポストエディット」という過程があるそうです。前者は元の文章を機械が理解し翻訳しやすいように、文を整える作業で、後者は機械が訳したものを目的に応じて読み手に受け入れられやすいよう、人間が手を入れる作業です。この両方の過程に欠くことができないのが、目標言語と母国語に関する卓越した知識と能力です。まさに外国語教育の真骨頂です。

2) 「形式的等価」と「動的等価」という言葉が講演の中で出てきました。かいつまんで言うと、前者は「原文の形式をそのまま残し、より原文に近い形で訳文にすること(直訳)」で、後者は意識「原文の要素を受け手に馴染みやすいように手を加えて訳すこと(意訳)」ということになるのでしょうか。文化が違えば、考え方・物の見方が違うことは多々あり、その伝え方も違ってきます。たとえこの先、機械翻訳がどれだけ進歩しても、この言語構造を超えた部分を解釈して補えるのは人間だけではないのでしょうか。

3) 機械翻訳は目覚ましく進歩しましたが、その訳は必ずしも正しいとは限りません。ですから、使う側も本当に正しいかどうか疑える力が必要です。時代の趨勢で、外国語教育において機械翻訳の有意性を認めないわけにはいきません。そうであれば、その利点・欠点を教育過程で教えていく必要があるのではないのでしょうか。

講演をお聞きして出た最初の問いに対する答えは、機械翻訳の精度が増してきた今だからこそ、異文化理解を含め、外国語をしっかりと学び・教えると同時に、母国語の感覚を磨かなければならないということです。ますます研鑽を積む必要がありそうです。

(文責：戎 妙子)



<講演に聴き入る参加者>



<山田先生>



<ディスカッション風景>